

《書 評》

Martha Malamud, *Rutilius Namatianus' Going Home: De reditu suo, translated and with an Introductory Essay*,

Routledge: London / New York, 2016, pp.xiii+89.

南 雲 泰 輔

本書は、「ラウトレッジ・後期ラテン詩 (The Routledge Later Latin Poetry)」シリーズの第1冊目として刊行されたものである。同シリーズは、4世紀から8世紀までのあいだのラテン詩の英訳を広く提供することを目的とし、今後、プルデンティウスやアウソニウス、エンノディウス、ユウェンクスらの作品の英訳が予定されているとのことである。後期ローマ帝国時代のラテン詩人たちの作品には、アウソニウスやシドニウス・アポリナリスのように、後期ローマ帝国史研究の重要史料とされてきたものがあり、そうした作品群が近年の研究の著しい進展を踏まえた英訳として容易に参照可能となるとすれば、リヴァプール大学出版局の *Texts for Historians* や聖書文学協会の *Writings from the Greco-Roman World* などとともに、歓迎されるべきシリーズの刊行開始といえることができるであろう。

本書で取り上げられるルティリウス・クラウディウス・ナマティアヌスは、ガリア出身の元老院貴族の一人であり、生没年は不詳であるが、412年に官房長官、414年にローマ市長官を務めた人物である。410年、アラリック率いるゴート族によって「永遠の都」ローマ市が劫略されるが、ルティリウスはこれを実地に経験した可能性がある人物であり、417年秋には、ガリアの所領が「蛮族」の侵入により荒廃したとの知らせを受けて、ローマ市から故郷ガリアへ、船で帰還の旅に出た。その記録が、現在『帰国 (*De reditu suo*. 以下 *DRS* と略)] の題名で知られる印象的な詩である¹⁾。

著訳者の Martha Malamud は、米国・コーネル大学で修士号・博士号を取得した西洋古典学者で、ローマ帝政期および「古代末期」の文学を専門とし、現在米国・ニューヨーク州立大学バッファロー校教養科学部古典学科教授である²⁾。1995年以降、西洋古典学の学術雑誌 *Arethusa* の共同編集委員も務めている。Malamud の代表的な業績は、多くが後期ローマ帝国時代のキリスト教徒の詩人プルデンティウスに関係するものであって³⁾、過去の業績にもルティリウスを中心的な主題として論じたものは無いようであり、したがって Malamud としては初めて公けにするルティリウス論・翻訳ということになるようである。

目次は以下の通り。本書は大きく序論と訳に分かれ、さらに序論は小見出しで11の節に分けられている。訳には、第1巻では11の、第2巻では4つの、原文にはない小見出しが

各々付されており、内容理解に資するよう工夫がなされている。

前文 (Preface)

謝辞 (Acknowledgements)

序論 (Introductory Essay): 背景 (Background) / ローマ市劫略 (The Sack of Rome) / 著者の生涯 (Life of the Author) / 異教徒かキリスト教徒か (Pagan or Christian?) / 構造と内容 (Structure and Content) / 韻律と様式 (Prosody and Style) / 詩の概要 (Summary of the Poem) / ルティリウスの旅程 (Rutilius' Itinerary) / 文学的影響 (Literary Influences) / 自己と他者 (Selves and Others) / ローマ世界における地図と方位 (Map and Orientation in the Roman World) / 註 (Notes)

訳 (Translation)

第1巻 (Book 1): ルティリウスは読者に挨拶し、ローマ市を離れる理由を述べる / ルティリウスのローマへの別辞 / 船出 / 航海の開始 / ルティリウスは豊穡の神の古像を描写し、次にケントゥムケッラエに上陸する / ルティリウスと同乗者はポルトゥス・ヘルクリスに上陸し、全世代に反逆者を生み出したように思われるレピドゥス家について論じる / ルティリウスはファレシア⁴⁾に停泊し、オシリスの祭りを見、不快なユダヤ人の宿屋経営者と出会う / ルティリウスは、親しい友人ケイオニウス・ルフイウス・ウォルシアヌスが、最近まで自分が就いていた高位の職ローマ市長官に指名されたことを知る / ルティリウスは修道士の住むカプラリア島を通過する / ルティリウスは友人ウィクトリヌスの訪問を受ける / ルティリウスはキリスト教隠修士が住む小さなゴルゴン島を通過する

第2巻 (Book 2): ピサ出発、ルティリウスはイタリアの形状を全体として描写するため旅人の視点から切り替える / イタリアの地理 / スティリコの罪 / ルーナ到着

註 (Notes)

補遺 (Appendices)

補遺 A 年表 (Appendix A: Timeline) / 補遺 B 断片 (Appendix B: The Fragments)

参考文献一覧 (References) / 索引 (Index)

DRS の近代語訳には、管見の限りでは、J. Vessereau と F. Préchac による仏訳 (1933 年。ビュデ叢書旧訳)⁵⁾、E. Doblhofer による独訳 (1972-7 年)⁶⁾、É. Wolff, S. Lancel, J. Soler による仏訳 (2007 年、ビュデ叢書新訳)⁷⁾ などがあるが、英訳では時代的に古い C. Keene と G. Savage-Armstrong (1907 年)⁸⁾ とロウブ古典叢書の J. Duff と A. Duff (1934 年)⁹⁾ があるのみで、20 世紀後半から現在にいたる研究の進展の成果を踏まえた新訳の登場が切望されていた。本書裏表紙には、M. Roberts (米国・ヴェズレイヤン大学) の「信頼できる序論と註を伴った Malamud の優雅な訳文は、ルティリウスの詩を、現代の読者たちにとって

初めて理解しやすいものとすることに成功している」との推薦文が寄せられており、宣伝文にも「文学的喩・構造・用語法・詩の様式・テキスト上の諸問題についての解説はもちろん、歴史的・文学的・文化的・神話的言及を採る重要な指摘と註釈を備えた、*DRS* の唯一の学術的な英訳」とあって、既存の解説や英訳を凌駕するであろう新訳への期待を高める。ただし、本書の前文において Malamud 自身は、「本書の狙いは、ルティリウス・ナマティアヌスの詩の読みやすく理解しやすい英訳と、21 世紀の読者にとってそれを理解可能なものにするための批判的・歴史的枠組みを提供することにある。*DRS* の学術的な決定版を作ることには、〔中略〕自分の意図するところではなかった」(p. xi) と述べており、やや調子が異なっている。

序論において Malamud は、*DRS* を「5 世紀の急激に変化し断片化してゆく時代における旅とコミュニケーション・ネットワークについて魅力的な洞察を与えてくれる」ものと位置づけ、詩人ルティリウスの生きた時代のローマ帝国は、キリスト教化、巨大な人口変化（ゲルマン諸民族の侵入）、そして厳しい内政衝突といった地中海世界のパラダイム・シフトの一部をなしていたとの的確な理解をまず提示する。そのうえで、4 世紀末から 5 世紀初頭の政治史、「ローマの運命の象徴的転換点」たる 410 年のローマ市劫略、ルティリウスの生涯、その信仰のあり方を概観する。アラリック率いるゴート族によるローマ市劫略は、衝撃的で精神的変容をもたらす出来事であったが、ローマ市への実害は破局的なものでなかったこと、しかし、*DRS* はローマ市劫略と移住する諸民族の波と内的衝突によって引き起こされた崩壊状態とに際会して、ローマ人エリートが感じた知的・感情的衝撃を反映するものだと述べる。ルティリウスの生涯の再構成、特にガリア帰還の可能性については、1986 年の H. Sivan 論文¹⁰⁾ に大きく依拠する（後述）。信仰のあり方については、*DRS* の登場人物の多くがクイントゥス・アウレリウス・シュンマクスの「サークル」に属していることから、ルティリウスの反キリスト教徒感情を読み取る従來說に対し、これを批判した Al. Cameron 説を採る¹¹⁾。それゆえに *DRS* が「シュンマクス・サークル」内の同士間のみで回覧された私的な詩であったとは想定しない。

続けて、Malamud が文学者であるためであろう、詩の構造、形式、技法、梗概、文学的影響について、*DRS* の内容から具体的な例を挙げつつ文学的見地から有益な解説がなされる。それらのうち評者にとって興味深かったのは、*DRS* の主題が、ローマ人アイデンティティ、亡命と帰還、崩壊の経験と再生への希望、故郷への愛とローマへの愛、友情 (*amicitia*) の結束、父祖から子孫へと受け継がれるものとしてのローマの継続性であること、ルティリウスは自らに第二のオデュッセウス、第二のアエネアスの役を割り当てており、その旅には逆説的な性格があるということ、すなわち、「ある意味では、オデュッセウスのごとく、彼は危機的状况にある生まれ故郷へと帰還しているのであるが、別の意味では、アエネアスのごとく、彼は劫略された最愛の都市から亡命しているのである」(p. 16)、そして、ルティリウスが範としたのがオウィディウスであること、以上の三点である。これらには先行研究で指

摘されてきた点も含まれているが、ローマ帝国時代の文学作品の系譜のなかで *DRS* を理解するために重要な前提をなすものであろう。

そして、「自己と他者」節で、ルティリウスにとっての旅とは、「自らのアイデンティティの公的な確認およびローマ国家への奉仕を示す手段の両方」(p. 19)であり、「ルティリウスは、個人的な理由からでも知識の追求のためでもなく、自らの故郷への義務感から旅した。彼は使命を負った人であった」(p. 20)のであり、さらに *DRS* 全体を通じ、ルティリウスは自らの高官としての地位と就任した官職を読者に想起させようとしていると述べる。ここで Malamud は、ルティリウスがピサ逗留時に馬車の提供を受けた描写 (*DRS* 1. 559-64) に着目し、この二輪馬車 (carpentum) はグラティアヌス治世にローマ市長官に利用が許可され、権力と公的アイデンティティの象徴になったものであって、ルティリウスの高い地位を再確認させるものであったことを指摘している (p. 20)。しかしながら、既にローマ市長官の地位を退いていた人間が、なぜそのような利用を制限された馬車を使用可能であったかについては考察されていない¹²⁾。また、「ローマ人エリートのアイデンティティにとって、家族の絆、地位、友情は本質的なもの」(p. 20)であって、ルティリウスの友人や親族への言及は、自己意識を確認するために重要な役割を果たしたと述べられる。他方、ローマ人意識 (Romanitas) を脅かす他者 (帝国外の敵である西ゴート族、帝国内の敵であるユダヤ人、キリスト教修道士、レビドゥス家、将軍スティリコ) について、ルティリウスは厳しく非難する。特に、「裏切り者」を輩出したレビドゥス家について、詩中での言及方法の解説は興味深い。序論最後の「ローマ世界における地図と方位」節では、*DRS* はルティリウスの抱いた「世界の心的地図 (mental map)」について多くを明らかにするものであるとされ、旅程表やポイティンガー図について簡単に触れられたのち、*DRS* がポイティンガー図のような象徴的作品と同種の役割を、より複雑で曖昧なやり方で果たすものであると主張される。

Malamud による英訳については、ロウプ古典叢書やビュデ叢書をはじめとする既存の近代語訳のように散文訳ではなく、可能な限り韻文訳となるよう工夫されていることが最大の特色であると考えられる。作詩の素養のない評者に、その完成度を云々する能力はもとよりまったくない。ただし、ラテン語原典が付された対訳形式となっておらず、英訳と訳註のみであるため、訳文が原典と行ごとに対応するように工夫した訳者の努力とページ割付の利点とが十分に活かされていないことは指摘しておきたい。英訳の提供という本シリーズの目的からして原典の全文掲載は必要ないとの判断であったのかもしれないが、底本としたテキストの書誌情報もどこにも見当たらず、学術的な利用には不便である。訳註において、訳についての説明をするために原典が引用されることがしばしばあることを見るにつけても、対訳形式のほうが望ましかったのではないかと惜しまれる。

訳文の彫琢に多くの労力が費やされたためであろうか、序論の内容には不注意と感じられる箇所が複数見受けられる。序論冒頭で、*DRS* の第2巻の散逸部分に属すると想定される1973年発見の断片2つが言及されたのち、「研究者たちは今や、ルティリウスが旅の途上で没

したのではなく、確かにガリアに到達したのだと一致している」(p. 1)と断言される。しかし、2つの断片の内容は文字通り断片的であり、ルティリウスの死によって第2巻現存部分末尾(DRS 2.8)で突如筆が折られたのではないことの証拠とはなりえても、彼がガリアに無事戻った事実を確認する根拠とはなりえないと考えられる¹³⁾。この箇所について Malamud は、断片 B に言及される逸名の都市を南仏・アルルと推定する Sivan 論文に多くを依拠するが(p. 9)、「それ〔評者補：Sivan のアルル説〕は証明できないけれども、Sivan の推測は魅力的でもっともらしい」(p. 14)とも述べ、ルティリウスのガリア到達が必ずしも論証されていない問題であることを認めており、前述の内容と矛盾を来している。また、「スティリコ」節では、「テオドシウスは、息子の一人アルカディウスを東方の正帝としてコンスタンティノープルに、二人目の息子ホノリウスを西方の正帝としてラヴェンナに残して没した」(p. 32)と述べられるが、これは「背景」節で「ホノリウスが西方においてテオドシウスの継承者となったとき、帝国首都はミラノにあった」(p. 2)と正確に記述していることと食い違う(ラヴェンナに帝国西部宮廷が移るのは402年)。「ローマ世界における地図と方位」節では、「古代地図学のおそらくは(perhaps)第一人者である R. Talbert は、ポイティンガー図の原本が、宮殿の応接間で玉座を収めていたのであろう後陣の壁に掛けられた4世紀末の地図だと信じている」と、彼の学説が要約される(p. 35)。しかし、Talbert は、Malamud が参照する2010年の著書でも、その他の数多くの論文でも、ポイティンガー図の原本は3世紀末のテトラルキア時代の成立と想定する旨を、繰り返し述べているのである¹⁴⁾。

また、意外にも校正漏れと思しきミスが散見され、100頁少々分量の本書では少々目立つのが気になった。気づいた箇所のみ指摘する。第一、「図2 ゲルマン諸民族の侵入」で、コンスタンティノープルの位置を示す黒点が、ヨーロッパ側ではなくアジア側に打たれている(pp.45)。また、同じ地図で、ローマ帝国の領域は白色、領域外は灰色で示されているが、凡例で白色部分が「ローマ国境地帯(Roman Frontier)」、灰色部分が「係争領域(Disputed Territory)」を示すとしているのは、一般的には誤解を招く表現であろう¹⁵⁾。第二、「図3 スティリコ・セレナ・エウケリウスのディプティック」を395年頃の制作とするが(p. 35)、Al. Cameron や彼に従う J. Martindale によれば、このディプティックはスティリコの息子エウケリウスが「将校兼書記(tribunus et notarius)」へ指名されたことを記念したものと推測されており、396年の制作であることが特定されている¹⁶⁾。第三、「補遺A年表」で、405-06年の行に‘Radagaisus’とあるのは、‘Radagaisus’の誤記(p. 77. 下線は評者)。第四、「補遺B断片」は、Sivan 論文におけるDRS断片の英訳を再録したものと明示されているが、出典の該当箇所を確認すると、僅かではあるが断りなく表記が改変されている箇所がある(p. 79)¹⁷⁾。第五、参考文献一覧で、O. R. Constable の著書の刊行年が2004年とあるのは誤記(p. 82. なお、p.41, note 39では正しく2003年と記載されている)。文献挙示も網羅的ではなく、I. Lana の著書や L. Porterfield の学位論文は参照されていない¹⁸⁾。

最後に、本書全体を通じて Malamud が、ルティリウスのDRSを、きわめて現代的な文脈

において意義づけようとしていることについて付言しておきたい。Malamud は、「5 世紀のゴート族の侵入による混乱に対するルティリウスの反応は、移動・移住・テロリズム・難民危機・残酷な他者への恐怖が遍在する 21 世紀の生活と実によく共鳴するところがある」(p. xii) と述べ、さらに、「ルティリウスは複雑な時代を生きたが、それは印象的なやり方で 21 世紀初頭を映し出している」(p. 2) とか、「21 世紀は不幸にも類似するところがある。戦争や飢饉やその両方によって、中東やアフリカを追われた何百万人もの自暴自棄になった人びとが、故郷の国に戻れないために新たな家を探しているからである」(p. 3) とか、「2001 年 9 月 11 日の出来事が、世界のなかでのアメリカの自己認識を急激に変えたのと同程度に、ローマ劫略は同時代の政治的・社会的・宗教的信仰に深刻な影響を与え、茫然とするほどの不信を経験させた」(p. 6) などと述べる。

このように書かれると、ヨーロッパで移民・難民問題が深刻化し、またアメリカ同時多発テロ事件の発生から 15 年という節目の年 (2016 年) に本書が刊行されたことの意味について、5 世紀初頭と 21 世紀初頭の時代状況にある種の共通性があるのではないかと、読者は否応なしに考えさせられてしまう。無論、DRS に描出された「蛮族」の侵入のローマ帝国への影響の深刻さを、過小に評価することは適切でない¹⁹⁾。また、歴史上の出来事を現代的な視点から類比・比較し意義づけることが意味ある作業であることにも異論はない。しかしながら、Malamud の上のような誘導は、ルティリウスの体験から現代性を過剰に引き出すことに熱心であり、そのためにかえて、DRS を、それが書かれた歴史的な文脈から甚だしく遊離した視座へと、読者を誤導してしまっているのではないかと思われる。DRS が、単なる「ヘイト・スピーチ」の詩として読まれ、否定的に位置づけられてしまうのではないかと、の危機は、評者の杞憂に過ぎないであろうか。

註

- 1) ルティリウス・ナマティアヌスについては、さしあたり、南雲泰輔「ルティリウス・ナマティアヌスとクルスス・プブリクス：後期ローマ帝国における公的伝達システム運用の一側面」『西洋古典学研究』62, 2014 年, 91-102 頁。
- 2) <http://classics.buffalo.edu/people/faculty/martha-malamud/>
- 3) Martha Malamud, *A Poetics of Transformation: Prudentius and Classical Mythology*, Ithaca / London, 1989; Id., *The Origin of Sin: An English Translation of the "Hamartigenia"*, Ithaca / London, 2011.
- 4) Wolff, Lancel et Soler (註 7 後掲) が「ファレシア (Falesia)」の読みを採用しており、Malamud もこれに従う (p. 69, note 61)。ただし、「ファレリア (Faleria)」と読むほうが多数派であるため、Wolff, Lancel et Soler (註 7 後掲) を底本とした南雲 (2014 年) でも、Doblhofer (註 6 後掲) や Duff & Duff (註 9 後掲) を参照して「ファレリア」の読みを採用した。
- 5) Rutilius Namatianus, *Sur son retour*, texte établi et traduit par J. Vessereau et F. Préchac, Paris, 1933.
- 6) E. Doblhofer, *R. Cl. Namatianus. De reditu suo sive Iter Gallicum*, 2 Bde, Heidelberg, 1972-7
- 7) Claudius Rutilius Namatianus, *Sur son retour*, texte établi et traduit par É. Wolff, S. Lancel et J. Soler, Paris, 2007.
- 8) C. Keene & G. Savage-Armstrong, *Rutilii Claudii Namatiani De Reditu Suo Libri Duo: The Home-Coming of Rutilius Claudius Namatianus from Rome to Gaul in the Year 416 A.D.*, London, 1907.

- 9) J. Duff & A. Duff, *Minor Latin Poets*, Vol.2, London & Cambridge MA, 1934.
- 10) H. Sivan, Rutilius Namatianus, Constantius III and the Return to Gaul in Light of New Evidence, *MS* 48, 1986, pp. 522-532.
- 11) Al. Cameron, *The Last Pagans of Rome*, Oxford, 2011, pp. 207-218. 本書については拙評(『Studia Classica』3, 2012年, 191-212頁)も参照。
- 12) この点については、南雲(2014年)、特に96-100頁を参照。評者は、Malamudとは異なり、この時の馬車利用は、ルティリウスが(ローマ市長官ではなく)官房長官であったことが重要だと考えている。ただし、Malamudは、註で「彼〔評者補：ルティリウス〕は官房長官としての自らの栄光の日々を顧みる機会を持った」(p. 40, note 31)とも記述しており、馬車利用に際して、ルティリウスの就任した官職としてローマ市長官と官房長官のいずれが決定的であったか、厳密な区別を行っていないようである。
- 13) 評者も、南雲(2014年)100頁において、ルティリウスが故郷ガリアに本当に帰ることができたか否かについては不明とした。
- 14) R. Talbert, *Rome's World: The Peutinger Map Reconsidered*, Cambridge, 2010, pp. 133-157. 南雲泰輔「クルスス・プブリクスとポイティンガー図：後期ローマ帝国時代における街道とその図示」『歴史学研究』950, 2016年, 147-155頁。
- 15) 図2はJ. Nicols(米・オレゴン大学)製作の地図に基づく旨が付記されているが、原図も同様であるかどうかは突き止めることができなかった。なお、前文に掲げられている「図1「危機の時代」のローマ帝国北部・西部」(p. xi)は、古代世界地図センター(Ancient World Mapping Center: <http://awmc.unc.edu/wordpress/>)製作の地図であるが、本書前文の内容と連関がなく、図版の掲載意図が不明である。また、「図4オスティアからルーナへのルティリウスの旅」(p. 38)は、同じく古代世界地図センターによる白地図にMalamudが関連する地名を書き込んだものであるが、白地図がイタリア半島全域を対象にしているため、地名が半島北西部のみに集中し、位置関係が入り組んでおり理解しにくい。ルティリウスの旅程を示すことが目的ならば、Wolff, Lancel et Soler (2007), p. xlのように該当地域の拡大図とするほうが適切であっただろう。
- 16) Al. Cameron, *Claudian: Poetry and Propaganda at the Court of Honorius*, Oxford, 1970, p. 48; J. Martindale, *The Prosopography of the Later Roman Empire*, Vol.2, A.D. 395-527, Cambridge, 1980, pp. 404-405.
- 17) Sivan (1986) 所収の英訳(pp. 523-525)と対照すると、原文にない半角ハイフンが挿入されている箇所(Fragment A 1.4, 'inn-keeper'のハイフンは原文にはなし)があり、また、コンマの有無(Fragment B 1.4, 'hospitality'の次に打たれているコンマは原文にはなし。同1.5, 'he'と'who'の間には原文ではコンマあり)が特記なく改変されている。
- 18) I. Lana, *Rutilio Namaziano*, Torino, 1961; L. Porterfield, *Rutilius Namatianus, 'De Reditu Suo'*, New York, 1971.
- 19) 南雲(2014年)100-101頁。

